〈論　文〉

『万葉集』にみる古代人と自然

The ancient Japanese and nature in “Manyou-shu”

阪口有美子（SAKAGUCHI, Yumiko）

Abstract

The ancient Japanese believed in nature. This paper examines Man-you poems of mountains. People want to receive the benefit of nature, but without receiving damage. The belief was one of the necessities of life. The ancient Japanese prayed for life.

はじめに

日本文化とは何か。その命題に一言では答えられない。文化とは人の身について離れないものである。箸の上げ下ろしから立ち居振る舞いまで、文化というものは私たちの身にまとわりついてくる。その文化の交流を考える上で、長い地球の歴史に対してごく僅かの歴史しか持たない人間がひいた国境は意味を持たないのである。しかしながら、山や海や川などの自然によって隔てられた人々は、その地域固有の文化を身につけている。その地域固有の文化は、近年の通信手段、移動手段の発達によって、新たな、それもめまぐるしい速度での再編成を行われつつある。日本文化と名付けられたものも、すさまじい速度で変容しているに違いない。しかし、変化はその渦中にいると、人が自覚できないうちに変化が起こってしまう。そう考えると、我々が生きて保持してきた文化も、同じ内容で同じ質のものが永久に存在するということはあり得ないと考えられる。文化は人と共に移動し、交流し変化していくのである。人々の交流が盛んになればなるほど、その変化は速度を増していく。筆者はそのことを念頭に置いて、今よりもゆっくり時が流れていたであろう古代に視点を定めて、日本文化について考察していきたい。文化が変化するとはいっても、ゆるぎない根があるはずである。ここでは、古代人の信仰を、自然とのかかわりの中から考察する。古来、人間は自然の中で生きていた。ある時は自然から恩恵を受け、ある時は害を被る。人間の意思では自然を左右することはできない。生きていくためには自然の恩恵は受けたいが、害は避けたいと思う。生きていくための祈りとはそのような中から生まれてきたのであろう。そのことを、日本最古の歌集である『万葉集』を中心に考察していきたい。

1　『万葉集』から考察する事象

『万葉集』は約 4500 首の歌をおさめ、主に 7 世紀から 8 世紀にかけてのものが 20 巻に分けて編纂された。ほぼ 1 世紀にもわたる歌謡集であり、その分期については様々な捉え方があるが、柿本人

麻呂を画期とする点はどの研究者にも共通しており、人麻呂を画期として古代的な自然観がみられなくなるという[1]。白川静氏は古代的な自然観について、自然に対する態度や行為によって自然との交渉を呼び起こし、霊的に機能させることが可能であると考えていたと述べ、伝承形態については巫祝的集団性を持ち、集団の存在が歌の伝承を可能にしたと論じている[2]。中西進氏は初期万葉の時代について、古代氏族制の社会から次第に天皇権を中心とする制度の整備に向かう時代で、集団的・儀礼的な記紀歌謡にみられる要素を濃厚にとどめていると述べている[3]。人麻呂の歌を境に天皇を賛嘆し、神とする歌がみられるが、それ以前の古代的な自然観を歌った万葉歌では、天皇を神とせず、人と自然の直接のかかわりを歌い、自然を自らの力の届かない神的存在と考えて歌っていると考えられる。最も、『万葉集』には詠み人しらずの歌も多く、詠まれた年代が分明でないものも多いが、作者と年代が特定できるものの中で、最も多く歌われている自然は山である。古来、日本人は山を信仰の対象としてきた。現在まで神の山と訴えられているものも少なくない。また、海、鳥、川などの自然が人麻呂以降の歌に多く取り上げられているのに比べ、初期の万葉歌から山は歌の題材となっている。万葉歌の歌人たちが山を多く取り上げたということは、古代人の自然観の中心のひとつに山があったといえるだろう。その山に対する自然観の上に、どのような信仰が重なってきたかを考察していけば、渡来文化の受容の中で生じる日本文化の変容の一部を、信仰という面から解くことができると考える。もちろん、『万葉集』が7世紀末から8世紀後半にかけて編纂されたものであるから、すでに渡来文化による影響を受けている。何を日本文化ととらえ、何を渡来文化と定義するかということにも言及しなければならないが、文字によって追及しうる限界を考察していきたい。

2 『万葉集』にみる古代人と自然のかかわり[4]

『万葉集』の歌からは、古代に生きる人々の自然観の一端がよみとれる。人間の力を越える自然が古代の人々にとってどのようなものであったのか、山を中心に考察する。

2番歌は天の香具山の頂に登り立って、舒明天皇が国見をした時の歌である。天の香具山は畝傍山、

1 中西進は120年にわたる『万葉集』を30年ごとに区切り、壬申の乱（672年）までを初期万葉、持統天皇の死（702年）までを白鳳万葉、天平元年（729年）までを平城万葉、その後、判明年代最後の歌である天平宝字3年（759年）までを天平万葉と分類している（中西進「万葉集全訳原文付（一）」1979中央公論社『中西進著作集19』2008四季社所収。小川靖彦は53番歌までを巻一原撰部で完成期は持統、文武代とし、元明代に原撰部以降の巻一と巻二を増補、聖武代に巻三から巻十六と注記を施し、光仁、桓武代に巻十七から巻二十を増補したという四期に分類している（小川靖彦『万葉集―隠された歴史のメッセージ』2010角川書店）。また、白川静は前期万葉を古代的な自然観の支配する時期であり、自然に対する態度や行為によって自然との交渉を呼び起こし、霊的に機能させることが可能であると考えた時代であると捉え（白川静「初期万葉論」1979中央公論社『白川静著作集11』2000）、遠山一郎は29番歌の近江荒都歌以前は人々に共有されていた神を単純に提示するが、それ以降は天皇と皇子に限った神を歌っていると述べている。（遠山一郎『天皇神話の形成と万葉集』1998塙書房）。

2 白川静 注1による。

3 中西進 注1による。

4 以下、万葉歌の口語訳は記載しない限り中西進「万葉集全訳原文付」（一）～（三）『中西進著作集19～21』2008四季社による。

耳成山とともに、飛鳥から望める三山の一つである。舒明天皇は天智、天武天皇の父であり、飛鳥に宮を置いていた。

高市岡本宮御宇天皇代　息長足日広額天皇（たけちのおかもとのみやにあめのしたしらしめししすめらみことのみよ　おきたらしひひろぬかのすめらみこと）

天皇、香具山に登りて望国（くにみ）しましし時の、御製（ぎょせい）の歌

大和には　群山（むらやま）あれど　とりよろふ　天（あめ）の香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は　煙立ち立つ　海原は　かまめ立ち立つ　うまし国ぞ　あきづ島　大和の国は

（巻一－二　雑歌）

歌謡の大意は以下の通りである。

大和の国には多くの山があるが、とりわけてりっぱに装っている天の香具山、その頂に登り立って国見をすると、国土には炊煙がしきりに立ち、海上には鷗が翔りつづけている。美しい国蜻蛉島大和の国は。

国土には炊煙、海上には魚を求める鷗が飛びかっているという生活資源の豊かな状況を歌っている。椎野禎文氏は「群山」は「ムラ山」ではなくムロ山でミモロのこと、「とりよろふ」は神霊が取り付きくる意であるとし、天香具山は神霊が依る山であると解釈している[5]。天香具山は神の山であると考えられていたが、このことは後で考察するとして、国見について考えてみる。国見というのは山や丘の上から大地を見て豊穣を祈願する行事のことである[6]。この歌では天皇が山の頂に登り立ち、国々を見はるかすということで、豊かな国を誉めたたえている。白川静氏によると、古代において「見る」という行為は「すでにただならぬ意味をもつものであり、それは他者との内的交渉をもつことを意味した。（中略）山川自然の姿、空ゆく雲、沖に漕ぐ船すらもみな、そのうちに豊かな生命力を持つものとして観ぜられる。そしてそれを見ることによって、その生命力は自己のうちのものとなり魂振り的に機能されるのである[7]」という。見ることによって、目に映ったものの生命力が自身のものとなるということになろうか。

『万葉集』の１番歌は雄略天皇の歌である。

泊瀬朝倉宮御宇天皇代　大泊瀬雅武天皇（はつせのあさくらのみやにあめのしたしらしめししすめらみことのみよ　おおはつせわかたけのすめらみこと）

天皇の御製の歌

籠もよ　み籠持ち　ふくしもよ　みぶくし持ち　この丘に　菜摘ます児　家聞かな　名告らさね　そらみつ　やまとの国は　おしなべて　吾こそおれ　しきなべて　吾こそませ　我こそは告らめ　家をも名をも

5　椎野禎文『日本古代の神話的観想』2002 かもがわ出版
6　監修 坂本勝　『万葉集』2009 青春出版社
7　白川静 注１p.110

（巻一－一　雑歌）

大意は以下の通りである。

籠もよい籠を持ち、ふくしもよいふくしを持ち、この岡で菜を摘んでいらっしゃる乙女よ、ご身分を言いなさい、名を名乗りなさい。（そらみつ）大和の国は、おしなべかせてわたしが君臨しているのだ。国のすみずみまでわたしが治めているのだ。私こそ名乗ろう、わたしの家の名も[8]。

この歌は雄略天皇の歌とされているが、家と名を尋ねるのは求婚を意味する。問われた女性が名を明かせば、求婚を受け入れたことになるという[9]。白川静氏は春菜摘みの乙女とそれに問いかける男の妻問いの歌であるとし解し、春菜摘みは神に献ずる神事であり予祝的な民俗的行為であると述べ、その予祝は神との約束を一定の条件のもとにみたすことによって成就されると述べている[10]。雄略天皇の歌が『万葉集』編纂の時期まで伝わっていたか否かは別として、早春に太陽の日差しを浴びて、一年の新しい息吹を含んでいる春菜を摘む習慣があったことがうかがわれる。春菜という自然からも生命力を得ているのである。春に芽を出し成長する草や鹿の角は、春に田植えをして秋に収穫を迎える稲の周期と同じである。また、『万葉集』では、天皇や皇子らによる遊猟が多く題材に取り上げられているが、その目的に自然界の中に身を置いて魂振りをするということが挙げられる。舒明天皇の皇女の間人皇女のことであると考えられている中皇命（なかつすめらみこと）が読んだ4番歌には、舒明天皇が原野に踏み入れて狩猟する様子が歌われている。

天皇、内野に遊猟しましし時、中皇命、間人連老（はしひとのむらじおゆ）をして献らしめたまへる歌

反歌

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝ふますらむその草深野

（巻一－四　雑歌）

大意は以下の通りである。

霊魂のきわまる命（うち）―宇智の広々とした野に馬をつらねて、朝、踏んでおられるでしょう。その草深き野よ。

遊猟はただ獲物を捕えるためではなく、神の領域である自然の中に足を踏み入れて、神から生命力を得るという観念が存在した。古代の人々にとって、神は自然の中に偏在していた。自然においても山は神であり、万葉歌にも多く取り上げられている。次の歌は天智天皇が近江に遷都する際に

8　口語訳は神野志隆光「雄略天皇」監修・神野志隆光『万葉集入門』2011 平凡社 による。
9　注7 p.92
10　白川静 注1 p.37 による。

奈良山の坂を越えた時、額田王が詠んだ歌である。

額田王、近江国に下りし時、作れる歌
味酒　三輪の山　おをによし　奈良の山の　山の際(ま)に　い隠るまで　道の隈(くま)　い積もるまでに
つばらにも　見つつ行かなむを　しばしばも　見さけむ山を　情(こころ)なく　雲の　隠さふべしや
（巻一－一七　雑歌）

大意は以下の通りである。

味酒の三輪の山が、青土も美しい奈良の山の山際に隠れるまで、幾重にも道を折り重ねるまで、しみじみと見続けて行こうものを、幾度も望みつつ行こう山を、心もなく雲が隠すべきだろうか。

額田王は近江へ行く途上で大和の神の山である三輪山が見えなくなることを惜しんでいるのである。これまで生を与えてきた神の山と別れ、異なる土地へ行く。新たに何に祈って生きていくべきかと考えて詠んだのであろうか。

そのような山と共に生きていくために欠かすことのできないものが水である。田畑を潤し命を育む水は山の神からの贈り物である。川が山から里へと流れ来る。次の 4 首の歌には山の神とその神の帯に例えられる川が歌われている[11]。

河を詠める歌
大君の三笠の山に帯にせる細谷川の音の清(さや)けさ
（巻七－一一〇二　雑歌）

大意は以下の通りである。

大君の御笠―三笠山が帯のようにめぐらしている細谷川の音のさやかなことよ。

大神大夫の長門守に任けらえし時、三輪河の邊に集いて宴せる歌
三諸(みもろ)の神の帯(むす)ばせる泊瀬河　水脈(みを)し絶えずは吾忘れめや
（巻九－一七七〇　相聞）

11　上野誠『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼―』1997 雄山閣
上野氏は三輪山を 5、6 世紀の宮所のカムナビであり、6、7 世紀の宮所の飛鳥にもカムナビの山が歌われているのに対し、三笠山は平城京の外京に接する土地であり、カムナビとは確認できないがカムナビ型の信仰を持っていたのではないかと述べている。しかし、この地域は古くから和邇氏が拠点としていた地域であり、さらに考察する必要があると考える。

大意は以下の通りである。

三諸の神が帯となさる泊瀬河の、水脈の絶えないかぎりあなたをどうして忘れようか。

葦原の　瑞穂の国に　手向けすと　天降(あも)りましけむ　五百萬(いほよろづ)　千萬(ちよろづ)神の　神代より　言ひつぎ来(き)る　甘南備の　三諸の山は　春されば　春がすみ立ち　秋行けば　くれなゐにほふ　甘南備の　三諸の神の　帯にせる　明日香の川の　水脈(みを)速み　生(お)ひためがたき　石枕(いはまくら)　こけ生(む)すまでに　新夜(あらたよ)の　さきく通はむ　事計(ことばかり)　夢に見せこそ　剣刀(つるぎたち)　斎ひ祭れる　神にしませば

（巻十三－三二二七　雑歌）

大意は以下の通りである。

葦原の瑞穂の国に手向けすとて天から降って来られたという五百万、一千万の神々の神代から語りついできた神南備の三諸の山は、春になると春霞が立ち、秋が来ると木々の紅が美しい。その神南備の三諸の神がわが帯とする明日香の川の、水の流れが早いので、生えてはそのままためることのできはい岩の蘿だが、一方、二人の枕には蘿が生えるまで永遠に来る夜も来る夜もめでたく夫が通ってくるような計画を、夢で見せてください。剣太刀の如く大切に祭っている神様でいらっしゃるのだから。

春されば　花さきををり　秋づけば　丹(に)の穂にもみつ　味酒(うまさけ)を　神名火山(かむなびやま)の　帯にせる　明日香の川の　速き瀬に　生ふる玉藻の　うちなびき　心は寄りて　朝露の　消(け)なば消ぬべく　恋ひしくも　しるくもあへる　こもり妻かも

（巻十三－三二六六　相聞）

大意は以下の通りである。

春になると花が枝をたわめて咲き、秋になると鮮やかに彩られて黄葉する味酒をかむ神奈火山が帯とする明日香川の速い瀬に生える玉藻のように靡いて心が寄り、朝露のように消えるなら消え失せもしようかと思われるほどに恋してきたことの甲斐あって逢えた隠妻よ。

1102 番歌の細谷川は三笠山の神が帯とし、1770 番歌の泊瀬河は三輪山の神が帯に結んでいると例えられた川である。3227 番と 3266 番歌の明日香川を帯にしている山は三諸の神、三諸の山、神名火山である。筆者は飛鳥の神の山は香具山であると考えていたが、地図を見ると明日香川を帯とするには少し遠い。岸俊男氏はこの神の山について、明日香の橘寺の後ろにある仏頭山の一つ後ろの名もない山の頂付近にミハ山という小字名があることを確認し、この香具山と向かい合うような山が飛鳥の神奈備であると解している[12]。筆者もその説に従いたい。これらの 4 首の歌からも、山が神と

12　岸俊男『古代史から見た万葉歌』2001 学生社 p.101

され、山から流れてくる川を神が身にまとっている帯として称えていることが分かる。

3　天の香具山

2番歌で舒明天皇が頂上から国見をした天香具山は、飛鳥川を帯とする神の山ではなかったが、天から降ってきたという伝承がある。「伊予の国風土記逸文」には次のようにある。

『伊予国風土記』逸文（前田家本『釈日本紀』巻七「天香山」条）
伊予郡。
自郡家東北在天山（あまやま）。所名天山由者、倭在天加具山。自天々降時、二分而、以片端者、天降於倭国。以片端者、天降於此土。因謂天山、本也。其御影敬礼、奉久米等。

大意は以下の通りである。
伊予の郡。
郡の役所より東北の方角に天山がある。天山と名付けている理由は、大和の国に天の加具山がある。その山が天から降ってきた時に二つに割れて、片方は大和の国に天降った。片方はこの伊予の国に天降った。これが天山と名付けている本縁である。その御姿は敬って久米たちが奉安しているということである。

また、「阿波国風土記」（断片）（冷泉家本『万葉集註釈』巻第三、二五七番歌条）には

（阿波国ノ風土記ノコトクハソラヨリフリクタリタルヤマノオホキナルハ阿波国二フリクタリタルヲアマノモトヤマトイフソノヤマノクタケテ大和国二フリツキタルヲヤマノカクヤマトイフトナム申ス）

大意は以下の通りである。
『阿波国風土記』で、空より天降ってきた大きな方が、阿波の国に天降ってきて、これを「天の本山」といっている。その山が一部割れ砕けて大和の国付いたついたものを「天の香具山」というと伝えている[13]。

このように天から降ってきた山という伝承のある天の香具山は『万葉集』には2番歌の他にも香具山をたたえた歌が残されている。天から降ってきた山であると歌われているのは257番歌は鴨君足人の作である。

13　校注・訳 植垣節也『風土記』2006 小学館による。

鴨君足人（かものきみたりひと）の香具山の歌一首並びに短歌

天降（あも）りつく　天（あめ）の香具山　かすみ立つ　春に至れば　松風に　池波立ちて　櫻ばな　木（こ）のくくれ茂（しじ）に　沖辺には　鴨妻よばひ　辺（へ）つ方（へ）に　あぢむら騒き　ももしきの　大宮人の　退（まか）り出て遊ぶ船には　楫棹も　無くてさぶしも　こぐ人無しに

（巻三－二五七　雑歌）

大意は以下の通りである。

天から降ってきたという聖なる香具山に霞みこめる春になると、松吹く風に池の波が立って桜の花は木の下もくらく茂り、味鴨が騒ぐ。壮麗な大宮の人々が御前を退ては遊ぶはずの船には楫も棹もなく寂しいことよ。漕ぐ人々も立ち去ってしまって。

いつの間も　神さびけるか香具山のほこ杉が本に苔むすまでに

（巻三－二五九　雑歌）

大意は以下の通りである。

いつのまにかこれほど神々しくなってしまったのだなあ。香具山に桙を立てるようにそびえている杉の根本に苔がはえるまでに。

257番歌は、春になると聖なる香具山に桜の花も咲き、鴨が騒ぐという自然の姿は変らないのに、都が飛鳥から奈良に遷り、大宮人もいなくなって船を漕ぐ人がいなくなり寂しい様子を歌っている。一首飛んで259番歌の短歌でも都が移ってから神杉の根本に苔が生えるほど長い年月が経っていることをうたっているが、257番歌では香具山は天から降ってきたものと歌われ、奈良時代に入ってからも天から降ってきた香具山の伝承の記憶が残っている。

『万葉集』は約1世紀に亘って読まれた歌を集めたものであるから時代に幅があるが、歌は詠まれたその時代を現わしている。一方、『風土記』は713年に諸国の国名、郡名、郷名によい字をつけよという事とともに、特産物や土地の肥沃状況、山川原野の名の由来、古老に言い伝えられてきたことを報告せよという詔命に従って諸国から出された報告書である。つまり、報告した時点での状況と伝承が書かれているのである。その時を歌った『万葉集』とは編纂の趣旨を異にしている。しかしながら、万葉歌にも古い記憶であるのか、詠まれた時点でもなお伝承が残っていたのか定かではないが、山にまつわる物語を思い起こさせる歌がある。中大兄皇子（天智天皇）の歌は飛鳥の都を囲う香具山、畝傍山、耳梨山を歌っており、三山にかかわる恋物語があったことを想像させる。

中大兄近江宮御宇天皇三つの山の歌一首

香具山は　畝火ををしと　耳梨と　相争いき　神代より　かくなるらし　いにしへも　しかなれこそ　うつせみも　つまを　争ふらしき

（巻一－一三　雑歌）

大意は以下の通りである。

香具山は畝火山を男らしい者として古い恋仲の耳梨山と争った。神代からこうであるらしい。現実にも愛するものを争うらしい。

この歌が、実際に天智、天武、額田王の三角関係を詠んだ恋の歌であるか否かはさておき、三山の恋歌の伝承があったことを想起させる。続く中大兄皇子の歌は

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に来し印南国原

（巻一－一四　雑歌）

とあり、大意は以下の通りである。

香具山と耳梨山とが争った時に、阿菩の大神が立ち上がって見に来た印南の国原よ。

と、香具山と耳梨山との争いを、阿菩の神が播磨の国の印南まで見に来ているというのである。阿菩の神は『播磨国風土記』揖保郡の条に

上岡里。本、林田里。土中下。出雲阿菩大神、聞倭和国畝火・香山・耳梨三山相闘。此欲諫止、上来之時、到於此処乃聞闘止、覆其所乗之船而坐之。故号神阜。阜形似覆。

とあり、大意は以下の通りである。

上岡の里。（もとは林田の里である）土品は中の下。出雲の国の阿菩の大神が、大倭の国の畝火・香山・耳梨の三つの山が闘いあっているとお聞きになった。そこで意見して止めさせようと思い、上ってこられた時、ここに疲れるや否や闘いが止んだとお聞きになり、そのお乗りの船をくつがえしてそこに鎮座された。だから神の阜と名づけた。阜の形は船を覆したのに似ている。

とある。『風土記[14]』の頭注に『万葉集』14 番歌について「この歌の主体を阿菩の大神とする説があるが、大神は『諫止』に来たのであって『見』に来たのではない。印南国原へ二山が見に来たのである。」とある。『播磨国風土記』に残る伝承によると三山の争いを出雲の国から阿菩大神が諫止に来たところ、争いが収まったので上岡で船を覆して鎮座した。中大兄皇子はこの伝承を踏まえて、香具山と耳梨山の二山がそろって、阿菩の大神が鎮座した上岡を見に来たと歌ったのであろうか。また、阿菩の神は出雲には伝承がなく、伊予の国から英保（あぼ）の里に移住した一族が報じた神と推察さ

14　注 11 による。

れる[15]。『播磨国風土記』の餝磨郡英保里の条には

英保里。土中上。右、称英保者、伊予国英保村人、到来居於此処。故号英保。

（大意）
英保の里。（土品は中の上）右の地を英保というのは、伊予の国英保の村の人がやってきて、ここにすまいしている。だから英保の村と名づけたのである。

とある。伊予国には前述したように風土記の逸文に香具山と二つに分かれて天から降った山の伝承があり、香具山との関わりが想起される。

このように、天から降ったという伝承を持つ香具山は推古朝より都を置く飛鳥にとって欠くことのできない山であることが分かる。次に挙げるのは『万葉集』52 番歌で、詠み人しらずであるが、天皇を称えるとともに飛鳥の都を誉めたたえ、都の命ともいえる飛鳥の水の源を称えている。

藤原宮の御井（みい）の歌
やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子（みこ）　あらたへの　藤井が原に　大御門　はじめたまひて　埴安（はにやす）の　堤の上に　在り立たし　見（め）し給へば　大和の青香具山は　日の経（たて）の　大御門に　春山と　繁（しみ）さび立てり　畝火の　この瑞山（みづ）は　日の緯（よこ）の　大御門に　瑞山と　山さびいます　耳無の　青すが山は　背面（そとも）の　大御門に　宜しなへ　神（かむ）さび立てり　名ぐはし　吉野の山は　かげともの　大御門ゆ　雲居にぞ　遠くありける　高知るや　天（あめ）のみかげ　天知るや　日のみかげの　水こそは　常にあらめ　御井の清水

（巻一－五二　雑歌）

大意は以下の通りである。

あまねく国土をお治めになる大君、高く輝く日の御子。荒布の藤井の原に新しい朝廷をお作りになって、埴安の池の堤の上にいつもお立ちになって御覧になると、大和の青々とした香具山は東の御門に向かって春の山とてうっそうと繁茂した姿を見せている。畝火の瑞々しい山は西の御門に対して瑞祥としての山の姿を見せている。耳成の青菅に囲まれた山は、北の御門の前に、恰好の形をもって神々しく聳えている。その名も美しい吉野の山は南の御門から遠く雲の彼方にある。高々と統治なさるよ。この大殿。天高く支配なさる大宮よ。その水こそは永久にあるだろう。

藤井の原は宮がある飛鳥の北である。東の門には香具山があって、西には畝傍山、北の門は耳梨山、南は少し遠いが吉野山が望める。東西南北を山に囲まれた、山々に守られた都であると称えている。

15　注 11 の上岡の里の頭注による。

飛鳥は6世紀末の推古天皇の代より次々と宮が営まれるが、この宮は持統、文武が営んだ藤原宮のことであろう。藤原宮は中国式の都城を取り入れた最初のものであるという。従って、東西南北を意識して営まれており、それぞれの門に山がそびえ、南は遠くはるかに開けているという恰好の地として称え、その地で国土を治める天皇を称えている。また、都であることの重要な条件として、都を支える多くの人々が生活を営むためにも豊かな水が必要である。その水も永久にあるはずであり、日の御子と称えられている天皇の世も永遠であると称えている。詠み人しらずのこの歌は、自然を愛でながらもその中から命をもらうという歌ではなく、あくまでも天皇が営んでいる都を誉め、天皇を賛美する歌に仕上がっているので、柿本人麻呂以降の歌であると考えられる。

では、もう少し、香具山について考察したい。香具山は舒明天皇が国見をしたり、他の山にはない天から降ったという伝承がある特別な山であることがうかがわれる。標高152mというそんなに高くもない山である。舒明はその頂上に登って国見をする。たとえ頂上に登っても海上が見えるとは考えられないが、国見によって国誉めをして魂振りをするのである。香具山にまつわる言い伝えは『日本書紀』にもみられる。崇神天皇9年9月の条に大彦命(おおびこのみこと)が北陸(くぬがのみち)に遣わされる途上、和珥坂(わにのさか)で少女(おとめ)が

御間城入彦(みまきいりびこ)はや　己(おの)が命(を)を　弑(し)せむと　窃(ぬす)まく知らに　姫遊(ひめなそび)すも

（歌謡18）

（大意）

御間城入彦よ。自分を殺そうと（誰かが）こそこそしているのも知らないで、女遊びしているよ[16]。

と歌っているのが聞こえてきた。この歌の意味を倭迹迹日百襲姫命(やまとととひももそひめのみこと)に問うと武埴安彦(たけはにやすびこ)が謀反する暗示であった。倭迹迹日百襲姫は

「是(これ)、武埴安彦が謀反(みかどかたぶ)けむとする表(しるし)ならむ。吾(あれ)聞く、武埴安彦が妻吾田媛(あたひめ)、密(ひそか)に来りて、倭(やまと)の香山(かぐやま)の土(はに)を取りて、領巾(ひれ)の頭(はし)に裹(つつ)みて祈(の)みて曰(もう)さく、『是、倭国(やまとのくに)の物実(ものしろ)』とまうして、則ち反(かへ)りぬ。物実、此をば、望能志呂と云ふ。是を以て、事有らむと知りぬ。早(すみやか)に図るに非ずは、必ず後(おく)れなむ」

（大意）

これは、武埴安彦が謀反する暗示であろう。私は武埴安彦と妻の吾田媛が密に来て倭の香具山の土を取ってヒレの端に包んで『これは倭国の物実』と祈り謀反したと聞いた。これで事は明らかであると分かった。早く対処しなければ手遅れになる。

16　口語訳は土橋寛『古代歌謡』日本書紀編1991角川書店による。

と語ったという。この記事から、香具山の土が大和の物実と考えられていたことが分かる[17]。『三国遺事』巻二「駕洛国記」には「建武 18 年（西暦 42 年）に亀旨峯にふしぎな声がして人々を呼ぶので、2, 3 百人がそこに集まった。すると姿は見えないが、人の声がして『天神が我に命じて、新しい国家を作り、その君となれとのことであったのでここに天降った。お前たちは峯の頂の土を掘りとって歌え。』」と言った記事がある。土橋寛氏はこの記事を引いて、亀旨峯の頂上の土を取るということから、亀旨峯が国見、歌垣の行われた駕洛の聖山であると述べている[18]。『日本書紀』に記載されている香具山の土と「駕洛国記」に記されている亀旨峯の土には共通点がある。

一方、香具山にまつわる伝承ではないが、『播磨国風土記』揖保郡伊勢野の条に

> 伊勢野。所以名伊勢野者、此野毎在人家不得静安。於是、衣縫猪手・漢人刀良等祖、将居此処立社山本、敬祭在山岑神、伊和大神子、伊勢都（比）古命・伊勢都比売命矣。自此以後、家々静安、遂得成里。即号伊勢。

（大意）

> 伊勢野。伊勢野と名づけるわけはこの野に民家が建つといつも平穏に住むことができなかった。そこで、衣縫（きぬぬい）の猪手（いて）・漢人（あやひと）刀良（とら）らの祖にあたる人が、ここに住もうとして神社を山の麓に建てて、社の山の峰にいらっしゃる神である伊和の大神の子、伊勢津比古（いせつひこ）の命（みこと）・伊勢津比売（いせつひめ）の命を敬い祭った。これから後、伊勢野の民家はみな安らかに住みつくようになり、遂に村里となることができた。それで伊勢と名づけたのである。

とある。誰も平穏に住むことのできなかった土地に、その名前から渡来人とみられる人々が来て住み始める。伊勢野の山の上にいる伊和大神の御子神を麓で祭ったところ、安穏に住むことができたという記載である。伊和大神は播磨地方の古くから信仰されてきた神であると考えられるが、御子神は山上にいたという。その神を渡来人が山の麓で祭った。つまり、在来の神は山上にいて、渡来人が神を祭るのは麓である。ここに、神の祭祀法の違いの一端があり、日本に古くから祭られている神々は山上にいたのではないかと推測できる。ただし、渡来人は一時に来るのではなく、もとの国も同じではない。先に挙げた「駕洛国記」では、頂上の土が香具山の土と同じように物実になっていることがうかがえる。今後の課題として、渡来人の信仰を考察する一視点としたい。

17 『古事記』には同様に少女が歌った歌の記載はあるものの、謀反の暗示であると感知したのは倭迹迹日百襲姫ではなく崇神天皇である。また、建波邇安王と表記されるタケハニヤスが香具山の土を取るという記載はない。今後の課題として記紀において記載事項が異なっていることについて考察しなければならないが、ここでは『日本書紀』に香具山の土が大和の物実であるという記事があるということにとどめておく。

18 土橋寛 注 14 歌謡 18 の解説による。

おわりに

以上、『万葉集』を中心に、古代日本の人々が自然の中の神に祈る姿を探ってきた。山は神もしくは神の宿る聖地であり、山から流れ来る川の水が絶えないことがその土地で生きていくうえで不可欠と信じられていた。また、見ること、愛でること、誉めることによって自らも魂振りをして生命力を振るい起すことができると考えていた。自然から力をもらうが害は被りたくない。そのような思いから「祈る」ということが始まったと考える。ここでは、川を帯としている歌について三輪山、明日香のミハ山、三笠山、天から降った山という伝承を持つ香具山について検討したが、人々が生きていく土地にはその土地の神が存在していたと考える。異なる土地の人々と交わることで神が交わり、新たな信仰も生み出される。三輪山の神、ミハ山の神、三笠山の神、また、天から降った山という香具山の神の歴史を辿っていけば、日本古代の宗教観の淵源にも言及できると考える。そして、『播磨国風土記』にみた山の神を山上で祭るか、山麓で祭るかという点でも、祭祀の実態に言及することができるはずである。文化とは創造である。人の交流と共に新たに創造されていく。ここまで考察してきたことはまだ不十分であり、課題も多いが、古代の人々の祈りの姿を中心に、渡来文化との交流、受容を考察していく端緒としたい。